

## 両義的なイメージの構造に関する研究：「髪」を題材としたネガティブイメージとポジティブイメージの関係に関する実験的考察

鶴巻, 史子

<https://hdl.handle.net/2324/1543989>

---

出版情報：九州大学, 2015, 博士（芸術工学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（4）

氏名	鶴巻 史子			
論文名	両義的なイメージの構造に関する研究 －「髪」を題材としたネガティブイメージとポジティブイメージの関係に関する実験的考察－			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	佐藤優
	副査	九州大学	教授	伊原久裕
	副査	九州大学	准教授	知足美加子

## 論文審査の結果の要旨

ポジティブなイメージとネガティブなイメージを併せ持つ美的感性に着目し、その構造を明らかにすることを目的とした研究である。両義的な美的感性は、「かわいい」というポジティブな表現に対して「キモカワ」や「グロカワ」などのネガティブな要素を受容し、あるいはポジティブに変えて刺激を強化する現象であり、現代日本の特徴的な美意識のひとつである。この現象を「髪」を題材として分析し、調査によって得られた要素をもとに実験的な作品をつくり、反応を確認しながら結論を導いた研究である。ネガティブなイメージからポジティブなイメージに転換する要素として「クリエイティブ」が作用していることを明らかにした。

序章では、研究の概要と構成を示している。

第1章では、ネガティブなイメージをポジティブに転換する要素を抽出する本研究の課題を説明している。

第2章では、両義的イメージの定義について述べ、先行研究を整理し、研究の視点と研究題材をまとめている。

第3章では、研究のプロセスと、研究に用いた5つの作品の意図について説明している。

第4章（事例研究1）では、髪から連想するイメージについて KJ 法を用いて3回に分けて聞き取り調査を行い、イメージされた要素を8つのイメージ要素に分類し、さらに、髪のイメージの構造化を試み、発生源、対象、原動力の3階層に整理している。

第5章（事例研究2）では、髪における印象調査と、身体から離れた状態の髪の43個の実験刺激の愛好と嫌悪の調査を行い、現実感と非現実感がイメージを左右する要因であることを明らかにした。

第6章（事例研究3）では、髪を表現要素として用いた作品125点を示し、現実感-非現実感の肯定的-否定的との関連を確認した。その結果、現実感-非現実感に加えて「身体性」が関わっていることがわかった。

第7章（事例研究4）では、現実感-非現実感と肯定的-否定的が不整合であった125点中26点と中間であった4点を加えて30点について、髪を用いた典型的な作品つくって80名を対象に印象評価を行った。そこからネガティブイメージがポジティブイメージに変わっていく要素として、感情項目で「動揺」、経験項目で「新しい発想」、心理項目で「触れたくない」という肯定的と否定的が交錯する特性が抽出され、次いで「驚く」、「未知感」、「強い印象/残る」が抽出された。この結果から、感情項目は不定的にも肯定的にもなりうる、経験項目は肯定的になりやすい、心理項目は

不定的にも肯定的にもなりうる、ということがわかり、これらを総括し、「クリエイティブ」という認識がネガティブイメージをポジティブイメージに転換させる要因になると結論づけた。

第8章では、以上の調査結果から求められた両義的イメージの諸特性を持つ髪をテーマにした5点の作品制作をとおして検証している。それぞれに否定的な要素を持ちながら肯定的な印象になっている作品であることが確認された。つまり、意図的に両義的イメージを計画できることが確認され、デザインにおいても活用できる可能性があることを実証した。

第9章では、研究の総括と今後の課題について述べている。

以上のおり本研究は、日本の美意識の特性のひとつである「両義的イメージ」の構造を解明することを目的とし、意識調査等による論理的な考究に加えて、作品を交えて実験的な調査研究を積み重ねて、ネガティブなイメージがポジティブなイメージに転換する要因をさぐり、「クリエイティブ」であることが作用することを明らかにした。実験に用いた両義的イメージを検証する作品も高い水準のものであり、芸術工学にふさわしい独創的な手法によって新たな知見を得た成果を高く評価した。

よって、本論文が博士（芸術工学）の学位に値するものであることを、本調査委員会は認めた。